あとがき

小さかった頃の家は、疏水分線のそばにあった。疏水分線は地形に逆行して流れていたので、その辺りでは天井川となって流れていた。日頃は30cm程度の水深であったが、台風などで大雨が降ると2m以上となりコンクリートの堤防を越えて水があふれることが数年に１回くらいあった。道路だけでなく、庭が浸水することもあった。近くに疏水が広くなったところがあり、昭和20年代には夏に水を堰き止めて子供の水泳場となったが、しばらくして水質の悪化で中止となった。中学生の頃は、友達と自転車に乗り南禅寺の船溜まりのすぐ下流に泳ぎにいった。勿論、当時から遊泳禁止であり、毎年のように子供が溺れてなくなっていた。橋の下で見ているお巡りさんが時々、「こら！」と怒りにくるのでみんな一斉に逃げるが、またほどなく泳いでいた。溺れている子供がいないか見ていたのであろう。

京都市は2010（平成22）年、琵琶湖疏水と周辺の庭園群などを含めて世界遺産登録への申請を長期的視点に立って取り組むと発表した。　(公社)日本水環境学会関西支部川部会／勝矢　淳雄

参考文献

・勝矢淳雄(2005)関西の川歩きNo.10 琵琶湖疏水－完成から100年、今なお京都に水を送り続ける－, 環境技術, 34(10), 61～63.
・京都市上下水道局(1962～2010)「水質試験年報」.
・京都新聞社編(1990)「琵琶湖疏水の100年」, 京都市水道局.
・山本四郎(1995)「京都府歴史散歩(上),(中)」, 山川出版社.
・山本武夫(1983)「日本史」, 旺文社.
・中西一彌「そすいのさんぽみち」　http://www.geocities.jp/biwako_sosui/
・京都市上下水道局HP　http://www.city.kyoto.jp/suido/sosuisyokai.htm
〔写真提供〕
・近代京都の礎を観る会(会の活動風景)

既刊の紹介

・源流を行く 編　『名張川』(2013)
・みやびな川 編　『白川』(2010)『鴨川・明神川』(2012)
・歴史とロマンの川 編　『瀬田川・宇治川』(2010)『保津川・桂川』(2011)『芥川』(2011)『猪名川』(2013)
・なにわの川・庶民の川 編　『東横堀川・道頓堀川』(2011)『恩智川・生駒の川』(2012)

（財）琵琶湖・淀川水質保全機構
〈企画編集〉(公社) 日本水環境学会関西支部川部会
（社）近　畿　建　設　協　会

琵琶湖・淀川　里の川をめぐる
～ちょっと大人の散策ブック～〈みやびな川 編〉

琵琶湖疏水　(Biwakososui)

〔発　行〕平成25年3月
〔発行者〕財団法人　琵琶湖・淀川水質保全機構
〒540-0008 大阪市中央区大手前1-2-15 (大手前センター ビル4F)
TEL. 06(6920)3035　FAX. 06(6920)3036
<ホームページ> http://www.byq.or.jp/
＊散策ブックはホームページ上で閲覧することができます＊

©BYQ, 2013　Printed in Japan

「　飲める水　遊べる水辺　次世代に　」

琵琶湖・淀川　里の川をめぐる
～ちょっと大人の散策ブック～

みやびな川 編

琵琶湖疏水
(Biwakososui)

（財）琵琶湖・淀川水質保全機構
（公社）日本水環境学会関西支部川部会
（社）近　畿　建　設　協　会

「琵琶湖・淀川流域散策ブック」のねらい

（財）琵琶湖・淀川水質保全機構と（公社）日本水環境学会関西支部川部会、（社）近畿建設協会は、大都市圏の川を水質という側面だけではなく総合的に把握し、その機能を再評価するために川部会が2001年より行ってきた活動の成果を基礎に、「琵琶湖・淀川流域散策ブック」をまとめることになった。

この散策ブックは、琵琶湖・淀川流域の河川を散策する時に気軽に携帯できるガイドブックを意図して作られており、対象河川の概要はもとより、流域の見どころ、名水や滝、水質や生物、その川にまつわる興味深い話などが、豊富な写真や地図を用いて解説されている。

散策ブック全体は、「源流を行く」、「おうみの川」、「みやびな川」、「歴史とロマンの川」、「なにわの川・庶民の川」の5編で構成され、それぞれ5、6リーフレットからなる。本リーフレットでは、みやびな川編として、琵琶湖を水源とし大津の三保ヶ崎から取水して、100年以上にわたって現在も京都に水を送り続けている琵琶湖疏水を取り上げた。

本ブックシリーズが、琵琶湖・淀川流域の河川に親しみを感じ、流域を散策するための一助になることを願っている。

目次

CONTENTS

ねらい・目次

琵琶湖疏水の概要 …… 02

山科疏水 …… 03

コラム１　田邊朔郎 …… 04

コラム２　天智天皇山科陵 …… 06

蹴上・南禅寺 …… 07

コラム３　琵琶湖疏水の水質 …… 10

岡崎・夷川 …… 11

コラム４　近代京都の礎を観る会 …… 14

（表紙写真／岡崎を流れる琵琶湖疏水）

1　琵琶湖疏水の概要

琵琶湖疏水は、滋賀県の琵琶湖を水源として京都市に水を送り続けている人工の川である。1885（明治18）年から1890（明治23）年までの5年間をかけて建設された琵琶湖第一疏水は、大津の三保ヶ崎から京都の鴨川合流点までの11.1kmである。鴨川の東岸を伏見堀詰まで下る鴨川運河8.9kmは、1892（明治25）年に着工し1894（明治27）年に完成した。合せて20.0kmが広義の琵琶湖第一疏水である。主に、舟運、水車動力（水力発電に変更）、灌漑などを目的に建設された。実質上の東京遷都で衰退した京都の起死回生をかけて1881（明治14）年に京都府の第3代知事に就任した北垣國道が決断し完成させた。

当時の国家予算が7千万円、内務省土木局の予算が100万円のとき、5年間に125万円余の巨費をかけて建設された国家的大事業であった。工事の主任技師は、工部大学校（現 東京大学工学部）を卒業したばかりの田邊朔郎で、疏水工事着工時は弱冠25歳であった。

当時最長のトンネルの2倍の距離（2,436m）のトンネルを必要とすることや堅固な地質であることから、日本の土木工事のリーダーであったオランダ人のお雇い技師デ・レーケや、内務卿の山縣有朋などに反対されたが、北垣國道の確固たる信念と田邊朔郎の不屈の精神でもって空前の大工事であった琵琶湖疏水を完成させた。

当時、大工事はお雇い外国人によって設計施工されるのが常識であった。しかし、計画・設計・施工などの全てを日本人の手のみによって完成させた琵琶湖疏水は日本の土木技術の独立宣言であり、明治期における日本の土木技術の到達点でもあった。1996（平成8）年に琵琶湖疏水に関わるインクライン、水路閣など12ヶ所が近代遺産として国の史跡に指定された。

琵琶湖疏水流域図

2 山科疏水

琵琶湖疏水の山科部分は、山科疏水と言う。京都市営地下鉄山科駅から**旧東海道**を東に行き、諸羽神社の鳥居を越えると徳林庵の門前に六角形の**地蔵堂（地花堂）**がある。後白河天皇が、都の守護、都往来の安全などを願い1157（保元2）年に平清盛に命じて京への街道の出入口六ヶ所に安置させた京都六地蔵の一つで**山科地蔵**という。小野篁が852（仁寿2）年に刻んだという六体の地蔵尊像の一体と言われる。

地蔵堂の東北隅には、**人康親王供養塔**がある。北側の**徳林庵**（非公開）は、仁明天皇の第四之宮人康親王の菩提を弔うために、1550（天文19）年に開創された。人康親王は病で失明したが琵琶の名手であった。盲人・座頭の祖神とされており、江戸時代には毎年検校位をもつものが全国から参集し親王を弔うための琵琶演奏をおこなったという。**四ノ宮**の地名の起こりは、親王が四番目の宮であったことからとも、諸羽神社が山科一八郷の四番目の社であったからとも言われている。

諸羽神社鳥居

地蔵堂

人康親王供養塔

十禅寺・人康親王御霊社

諸羽神社

諸羽トンネル出口

京阪京津線の東側に**十禅寺**がある。平安時代の859年、人康親王を開山として創建された。度々の戦火で荒廃したが、1655年明正天皇によって再興された。人康親王の墓、**御霊社**がある。

旧東海道を諸羽神社の鳥居まで戻って、北に行くと**諸羽神社**である。この神社は、清和天皇862（貞観4）年に社殿が造営されたと伝えられる古社で、四ノ宮、安朱、竹鼻の産土神である。2度の焼失をへて現在の社殿は、1768（明和5）年の再建である。神社の南東の境内は人康親王が隠棲した山荘の跡である。本殿裏の階段を登ると疏水を巡る散策路に出る。**諸羽トンネル**の出口があり、ここからは桜の名所になっている。このトンネルはJR湖西線の拡張工事のために、1970（昭和45）年に新たに建設されたものである。

コラム1　田邊　朔郎

田邊家は幕府に仕えた家であったが、田邊朔郎が生まれた1861（文久元）年の9ヶ月後に42歳で父親が麻疹で亡くなった。その後の明治維新で生活は困窮し、この時の母親の辛苦が田邊朔郎の不屈の精神を養ったと言われている。

1871（明治4）年に叔父の田邊太一が外務省に任官し、しばらくの間平穏に過ごせるようになった。工部大学校（現 東京大学工学部）に入学したが、叔父が破産し学資が工面できなくなり、借金をして学業を続けた。

工部大学校の目的は新しい日本の国土造りであり、卒業研究は全国の実地研究であった。田邊朔郎は「東海道筋并京都大坂」での学術研究が命じられ、琵琶湖疏水をテーマに取り上げた。

冬の雨が明けた日に疏水路線の検討と地質の調査のために山を踏査しているとき、足を滑らせ右手の中指を岩に打ちつけ、その上にハンマーを落として骨折した。治療するお金が無くて骨膜炎を悪化させ1年半激痛に耐えて、右腕をつったまま左手で製図をして「琵琶湖疏水工事の計画」をまとめた。

京都府に任官が決まり、その支度金でやっと手術をしたが、右手中指は第1関節と第2関節の間を切除し短くなってしまった。1944（昭和19）年、82歳で逝去した。

〔田邊朔郎の像〕

安朱橋から毘沙門通を北に緩い坂道を登る。左手の瑞光院（非公開）は赤穂藩主浅野家の菩提寺で、境内に浅野内匠頭の供養塔や大石良雄ら赤穂四十六義士の遺髪塔がある。1962（昭和37）年に上京区から現在地に移転した。

さらに進むと毘沙門堂である。56段の急階段を登ると仁王門に着く。天台宗の門跡寺院で、703（大宝3）年行基の創建と伝えられている。当初は出雲路（上京区）にあり出雲寺といったが、たび重なる戦乱で荒廃により転々とし、1665（寛文5）年に現在地に再建された。本尊の毘沙門天は、伝教大師が刻んだと伝えられ、京の七福神のひとつである。

毘沙門堂の西に、毘沙門堂の塔頭の双林院がある。本尊の大聖歓喜天（秘仏）は、霊験あらたかといわれており、「山科の聖天さん」として広く信仰されている。比叡山無動寺より勧請された不動明王、不動の滝などがある。入口に鳥居があることから、かつては神仏混淆の歴史があったと思われる。

山科疏水に架かる安朱橋から疏水沿いの散策路を西に進み、洛東高校を過ぎると安祥寺橋がある。安祥寺（非公開）は、平安時代の名刹で、847（承和14）年に仁明天皇の女御藤原順子を願主として創建された。下寺と上寺とが広大な境内を所有していたが荒廃し、宝暦年間（1751～64）に現在地に再建された。

山科疏水沿いの道は、普段はジョギングや犬の散歩、散策の老夫婦などが通るだけのひっそりとした地道である。疏水は天智天皇山科陵の北側を回り、それに沿って進むと本圀寺の朱塗りの正嫡橋が緑に映えている。本圀寺は、日蓮宗の大本山で、1253（建長5）年に日蓮が鎌倉松葉ヶ谷につくった法華堂に始まる。幾多の変遷を経て、

毘沙門堂

双林院・不動明王堂

正嫡橋

日本最初の鉄筋コンクリート橋

煉瓦工場跡碑

天智天皇山科陵・日時計

1971（昭和46）年に現在地に移転し立派な伽藍が再建された。

疏水は長さ125mの小さな第2トンネルとなり散策路は終了する。トンネル入口には、井上馨揮毫の「仁以山悦智為水歓」の石の扁額が篆刻されている。疏水の各トンネルの出入口には、明治の元勲などの揮毫による石の扁額が篆刻されており、国の史跡となっている。入口は陰刻、出口は陽刻となっている。

手作りの小さな案内板に沿ってぐるりと回ると再び疏水に出会う。第3トンネル入口前に架かっている橋は幅1.6m、長さ9.7mであるが、1903（明治36）年に造られた日本で最初の鉄筋コンクリート橋で、やはり田邊朔郎が設計・施工した。山科疏水はここで第3トンネルとなり終了する。入口には松方正義揮毫の「過雨看松色」の石の扁額が篆刻されている。

南に下って国道143号線に出ると京都市営地下鉄東西線の御陵駅である。第2出入口横に煉瓦工場跡碑がある。当時、疏水工事に要する1,400万個のレンガを製造できる工場はなく、このためレンガを焼く工場を山科区原西町付近（御陵駅北東）に建設した。疏水に使うレンガのほとんど全てをこの工場で製造した。国道143号線を東に行くと天智天皇山科陵の入口である。入口には日時計が設置されている。長く真っ直ぐに続く参道を行くと、上円下方墳の天智天皇山科陵の正面である。

コラム ❷　天智天皇山科陵

小倉百人一首の巻頭の和歌は、「秋の田の　かりほの庵の苫をあらみ　わが衣手は露にぬれつつ」で、天智天皇の御歌である。天智天皇（626～671）は、舒明天皇の皇子で、中大兄皇子といった。645（皇極4）年に中臣（藤原）鎌足とはかって蘇我氏を滅ぼし、大化の改新を行った。孝徳・斉明天皇のもとで20年間を皇太子として改新政治を推進した。

661（斉明7）年、斉明天皇は筑紫で亡くなり、皇太子中大兄皇子の称制のもとに百済を救援するために朝鮮に出兵したが、663（天智2）年に白村江の戦で唐・新羅連合軍に大敗した。667（天智6）年に近江に都（大津京）を移し、翌年に即位した（第38代天皇）。670（天智9）年に日本最初の全国的な戸籍である庚午年籍や、近江令を作らせるなど律令国家体制の基礎をかためた。671（天智10）年に没すると、山科の地が陵墓地に選ばれたが、壬申の乱が起こり、28年後の699（文武天皇3）年になってようやく完成した。

〔 天智天皇山科陵 〕

3 蹴上・南禅寺

地下鉄蹴上駅を出ると、国道143号線の南斜面に**蹴上浄水場**がある。第二疏水とともに計画され、1912（明治45）年4月から市内に水道水を供給しだし、京都の水不足が解消した。日本で最初の急速ろ過方式を採用し、そのろ過池は1997（平成9）年まで現役で動いていた。当時の供給能力は、6.8万㎥/日であったが、現在は第2系統のみで9.9万㎥/日である。4,600本あるつつじの名所で、毎年5月の初旬には一般に公開されている。

蹴上駅の1番出口から**三条通**（国道143号線）に沿って少し西進すると右側にインクラインの下をくぐるレンガ巻きの長さ18mの小さい歩行者専用のトンネル「**ねじりまんぽ**」がある。まんぽとは、主に鉄道をくぐるトンネルを意味する関西地方の方言で、アーチ式天井は巻き貝のようにレンガが螺旋状に組まれているので、捻れて見えることから“ねじりまんぽ”という。トンネルがインクラインの土盛りに対して斜めになっているので、ねじって螺旋に積むことにより土盛りに直交し、アーチの荷重をきちんと地盤に垂直に伝える工夫だそうである。南側入口には北垣國道京都府知事の揮毫で「雄観奇想」の**石の扁額**がある。

蹴上浄水場の一般公開

日本最初の急速ろ過池

ねじりまんぽ

北垣國道
「雄観奇想」

インクラインの桜

義経地蔵

殉職者慰霊碑

田邊朔郎像

蹴上の舟溜りの台車と舟

インクラインの跡は、1977（昭和52）年に復元整備され散策路となっている。ここから蹴上の舟溜りまでは桜の名所である。桜守りで有名な第16代の佐野藤右衛門氏が守をしている。途中に舟を載せた台車が形態保存されている。インクラインは蹴上発電所の送電を待って1891（明治24）年に営業運転を開始し、1948（昭和23）年に休止するまでの57年間動いていた。長さ582m、高低差36mで10～15分で上下した。当時の人たちは、「舟が山を登る」と驚嘆し、年間利用者が10万人を超えた年もあったという。

さらに登ると右手に疏水工事で亡くなった人たちの**殉職者慰霊碑**があり、「一身殉事萬戸霑恩」の銘と裏に殉職した17名の氏名が刻んである。田邊朔郎が、疏水工事での尊い犠牲を長く広く人々に伝えようと1902（明治35）年に自費で建立したものである。慰霊碑の左側にあるのは、**蹴上義経地蔵（義経大日如来）**である。牛若丸（遮那王）の奥州下りにまつわる騒動の伝説が**蹴上**の地名の由来と伝えられている。遮那王は9体の地蔵を建て斬り捨てた9名を供養し、そのひとつと言われているが、伝説は史実ではないという。ちなみに、「蹴上」という住所表示はないが、この辺りを伝説から通称、蹴上と言っている。

左手の広場にはブロンズの青年技師**田邊朔郎像**がある。**蹴上の舟溜り**には、台車や台車を引っ張り上げた直径3.6mの鉄製の滑車が置かれている。南側は第一疏水、北側は第二疏水の出口で

ある。蹴上浄水場では第二疏水を水道用水源として利用している。レンガ造りの建物は、著名な建築家・片山東熊が設計した**御所水道ポンプ室**（現九条山浄水場ポンプ室）で、防火用水を京都御所へ送るために1912（明治45）年に建設された。

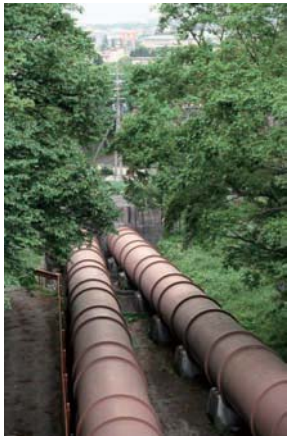
左の山すそに沿って**疏水分線**が流れる。分線は地形に逆行して北上し、銀閣寺を通り松ヶ崎まで水を送っている。松ヶ崎には**松ヶ崎浄水場**がある。蹴上舟溜りから暗渠で松ヶ崎浄水場まで水が送られるようになって、かつては満々として水が流れた開渠は今では水深は極浅くなっている。分線へ渡る橋の上から蹴上発電所への導水管とその先に平安神宮の大鳥居が遠望できる。

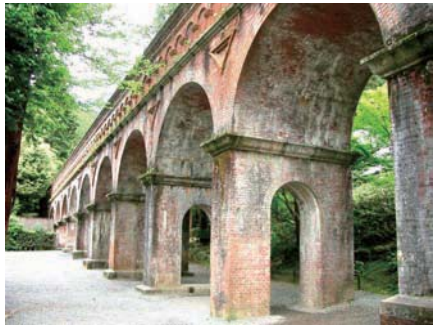
分線に沿って山すそをまわると**水路閣**の上部に至るが、崖沿いの狭い通路で少々危険であり、インクラインを戻り南禅寺境内から行くのもひとつである。水路閣はローマ水道の水道橋を思わせる様式でレンガ造りである。南禅寺の境内の隅とはいえ、境内を横切る赤いレンガの水路閣は周囲の雰囲気にも強い違和感を与えたと思われる。福澤諭吉は「山水の美、古社寺の典雅を傷つける、いわゆる文明流に走りたる軽挙」と厳しく非難したが、廃仏毀釈の嵐の中で、当時の南禅寺は逼塞（ひっそく）していて何も言えなかったのであろう。その水路閣も今では古色を帯び周囲の雰囲気にも溶け込んでひとつのすぐれた景観となっている。

東に**南禅寺方丈**がある。南禅寺は臨済宗南禅寺派の大本山で、亀山天皇が1264（文永元）年に造営した離宮を前身とし、1291（正応4）年に大明国師を開山に迎えて創建した。京都五山の上の別格に置かれ、京都五山文化の発展に寄与した日本の歴史を知る上で重要な寺院である。南禅寺境内は、2001（平成17）年に国の史跡に指定された。

第二疏水出口（下）、第一疏水（上）と御所水道ポンプ室

疏水分線


発電所送水管


水路閣

南禅寺三門

三門からの眺め

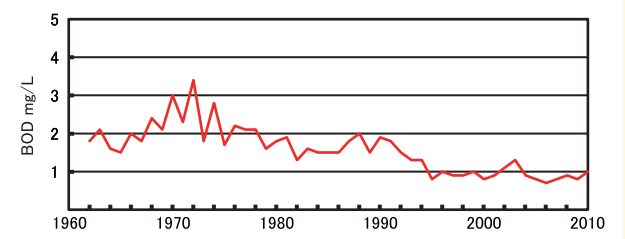
れた。

西に下っていくと、日本三大門の一つに数えられている南禅寺の**三門**があり、高さ22mの偉容さに圧倒される。現在の三門は1628（寛永5）年、藤堂高虎が大阪夏の陣に倒れた家来の菩提を弔うために再建したもので、国の重要文化財に指定されている。史実ではないが石川五右衛門が隠れ住んだといわれ、歌舞伎「楼門五三桐（さんもんごさんのきり）」で五右衛門の「絶景かな、絶景かな」という台詞で有名である。実際、上層に上がると京都市内の遠望は素晴らしい。西に坂を下った南側にある**金地院**は、南禅寺の塔頭のひとつで徳川家康の信任を受け側近として黒衣の宰相と呼ばれ、大坂の陣の発端となる方広寺の鐘銘事件にも関与したと言われる以心崇伝の自坊である。小堀遠州の作庭の確証がある唯一の枯山水の庭園「**鶴亀の庭**」（国指定特別名勝）などで有名である。

コラム ③　琵琶湖疏水の水質

琵琶湖第一疏水は、主として維持用水として流れているために単独では水質調査は行なわれていない。岡崎にある慶流橋は、蹴上で琵琶湖第1疏水と第2疏水が合流し、さらに岡崎で普段は小流量の白川が合流した下流にある。夷川ダムは、慶流橋の約1km下流になるが、水質的条件は変わらない。

琵琶湖疏水の水質は、基本的には琵琶湖南湖の水質である。BODでみると、1960年代後半から高度成長期の時代となり一般の河川と同様水質が悪化したが、1970年代後半からは各種の法規制や住民の努力によってBODは長期的に減少傾向になった。1995年以降は、ほぼ1mg/L以下となっている。



〔 慶流橋のBOD経年変化 〕
（1974年以前の地点：夷川ダム）

4 岡崎・夷川

国道143号線（三条通）と**仁王門通**との分かれ目に、**蹴上発電所**がある。最初は水車動力を計画していたが、田邊朔郎と高木文平は疏水工事途中の1888（明治21）年に米国のアスペンに水力発電を視察し、水力発電の将来性を見通して水車動力の予定を急遽（きゅうきょ）変更して水力発電を導入した。商業用の水力発電として日本で最初のもので、80kWの直流発電機2台で1891（明治24）年から送電を開始した。インクラインもこの電気を使って動かされた。日本初の路面電車（京電）も、この電気を使って1895（明治28）年に運行を始めた。水力発電は新しい産業の振興に多大な貢献をし、京都市発展の一大原動力となった。レンガ造りの建物は1912（明治45）年の第2期ものである。現在は第3期の別の建物で無人で発電されており、発電量は4,500kWである。琵琶湖疏水にある蹴上発電所と夷川発電所、墨染発電所（伏見区）は、**琵琶湖疏水発電所群**として平成13年度の土木学会選奨土木遺産として認定された。

仁王門通の北側には、**南禅寺舟溜り**と**琵琶湖疏水記念館**がある。この記念館は、琵琶湖疏水竣工100周年記念事業の一環として1989（平成元）年に建設された。嶋田道生が烏口で微細に作成した大津・京都間の大きな「**通水路目論見実測図**」は見る人を圧倒する。田邊朔郎の遺族の方から提供を受けたイギリス土木学会の**テルホード賞のメダル**、工事日誌など工事の計画から完成までの貴重な資料や機器、河田小龍や田村宗立の疏水工事の絵画、中庭には**ペルトン水車**、**スタンレー式発電機**など数々の品が展示されている。

琵琶湖疏水記念館の南側は、疏水を挟んで

蹴上発電所

琵琶湖疏水記念館

通水路目論見実測図

テルホード賞メダル

ペルトン水車

スタンレー式発電機

無鄰菴

岡崎十石舟遊覧と琵琶湖疏水記念館遠望

京都市美術館

平安神宮應天門

蒼龍池と臥龍橋

チンチン電車

無鄰菴（むりんあん）（公開）がある。無鄰菴は、明治の元老・山縣有朋が京都に造営した別荘で、1896（明治29）年に完成した。庭園は、有朋自らの設計・監督により、名造園家・小川治兵衛（七代目植治）が作庭したもので、明治時代の名園として1951（昭和26）年に国の名勝に指定された。洋館の2階は、しばしば要人の会議に使われた。1903（明治36）年4月21日には，元老・山縣有朋、政友会総裁・伊藤博文、総理大臣・桂太郎、外務大臣・小村壽太郎の4人によって、日露開戦直前のわが国の外交方針を決める「無鄰菴会議」が開かれた。

仁王門通を疏水に沿って行くと、対岸には日本で2番目の開園の**京都市動物園**と、**京都市美術館**とがある。**慶流橋**の向こうに高さ24mの**平安神宮大鳥居**、そして突き当りが**平安神宮應天門**である。平安神宮は、平安奠都（てんと）1100年を記念して、1895（明治28）年に平安京を造営した桓武天皇を祭神として創建された。平安神宮の社殿は、平安京の正庁、朝堂院が8分の5の規模で再現されている。

神苑は社殿を取り囲むように1万坪の広さがあり、七代目植治の作庭で1975（昭和50）年に国の名勝に指定された。**蒼龍池**（そうりゅうが）の**臥龍橋**（がりょう）は、天正年間に豊臣秀吉によって作られた三条大橋と五条大橋の橋脚を再利用している。平安神宮の創建と同じ1895（明治28）年に、京都市内に敷設された日本で初めての電車である**チンチン電車**も展示されている。琵琶湖疏水は植治の技とあいまって岡崎・東山界隈に幾多の名園を残している。京都三大祭の一つである時代祭は平安神宮の祭礼で、御所を出発して平安神宮に至る。

岡崎地域は1881（明治14）年から1903（明治36）年まで京都博覧会が開催された跡地で、**京都国立近代美術館**、**京都府立図書館**、**京都市勧業館**

（みやこめっせ）、京都会館、京都観世会館、中国陶磁を展示する藤井有鄰館（武田五一の設計で屋上に朱塗りの八角堂を乗せた東洋的な雰囲気の建物）などもあり、京都市の芸術・文化ゾーンである。みやこめっせの地下には「京都伝統産業ふれあい館」があり、仏壇、仏具、京人形、清水焼、友禅、西陣織、金属工芸品など京都の多種多様な伝統産業の品々が展示され、京の伝統産業の美と技が紹介されている。岡崎地域一帯は、平安時代後期の院政期に天皇や皇后などの発願によって建立された6つの寺（六勝寺）の跡地にもあたる。6つの寺とも「勝」の字が付くので、六勝寺と総称した。現在も、法勝寺町、円勝寺町などの町名として残っている。

岡崎地域の水辺として水路幅を18mと広げた疏水は鴨東運河（おうとう）といい、周囲の景観に落ち着きとやすらぎを与えながらゆっくりと迂回して西に流れ、やがて夷川の舟溜りに至る。1890（明治23）年の琵琶湖疏水竣工式は、夷川の舟溜りで行なわれた。前日には、祇園祭の鉾や山が並べられ、大文字も点火され、多くの人出で賑わったという。竣工式は、明治天皇・皇后両陛下の臨席のもとに開催された。琵琶湖疏水が日本の大土木事業と認識されていたことがわかる。疏水事業を完成させた第3代京都府知事・北垣國道の銅像が建てられ、高い台座の上から疏水を見守っている。1902（明治35）年に建てられた銅像は、第2次世界大戦中の金属類の供出でなくなったが、琵琶湖疏水100周年を記念して1990（平成2）年に再建された。

夷川舟溜りの広い水面を利用して、1896（明治29）年に武徳会が京都で最初の水泳講習を夷川水泳場として始めた。戦後、京都踏水会に引き継がれていたが昭和30年代から水が濁りはじめ、つ

京都国立近代美術館と平安神宮の大鳥居

京都会館

京都市勧業館（みやこめっせ）

夷川舟溜り

北垣國道銅像

夷川発電所

鴨川運河の地下化

いに1969（昭和44）年に70余年間続いた水泳使用も打ち切られた。現在、京都踏水会は舟溜りの北側にあり、日本のスイミング・スクールの草分け的存在である。

夷川舟溜りのレンガ造りの夷川発電所は、第二疏水計画の一環として1914（大正3）年に建設された。それ以来、現在も無人運転で市内に送電している。有効落差3.42mという低落差で、現在の認可最大出力は300kWである。

疏水は川端通の田辺橋の下を抜けて鴨川に至る。鴨東運河はここで終わり、今度は鴨川の左岸を鴨川運河となって伏見の堀詰まで流れる。1894（明治27）年に竣工した。これで、大津から琵琶湖疏水、宇治川、淀川を通じて大阪に繋がる輸送路が出来たことになる。1989（平成元）年の京阪地下化に伴い、鴨川運河は三条通り手前から地下化された。

コラム 4　近代京都の礎（いしずえ）を観る会

2003（平成15）年3月に京都で第3回世界水フォーラムが開催された。その年10月に、それまでに集まっていた15人の人たちが、琵琶湖疏水の観光開発をテーマとして「近代京都の礎を観る会」を発足させた。水フォーラムで造られた十石舟による「岡崎さくら・わかば回廊十石舟めぐり」を他団体とともに京都市に提案し実現させ、主催団体のひとつとして活動をしている。講演会、大学での特別講義、散策会などを実施し、疏水を京都活性化の一助となるよう努めている。毎年秋には、大津の三保ヶ崎の取り入れ口から琵琶湖疏水記念館までのウォーキングツアーを他団体と一緒に定員200名で実施している。

京都市や滋賀県などの行政へも、琵琶湖疏水を近代化産業遺産をたどる歴史の道にすべく積極的に各種の提案をおこなっている。2010（平成22）年には、冊子「琵琶湖疏水の歴史散策」を京都市ニューツーリズム創出事業の支援を受けて1万部作成し、疏水に存在する近代化遺産に焦点を当てて、その保全と観光資源化を図っている。

〔近代京都の礎を観る会の活動風景〕